「教育社会学」の思い出

上田　行雄（学芸・昭和４１年卒）

私は、香川大学学芸学部に在学中、教育学研究室の教育社会学に 4 年間属していた。先生は稲井広吉教授で、学生たちは割合自由に学んでいた。稲井教授の専門分野は「漁村教育社会学」で県下の漁村に赴き、各種調査を実施して考察研究をしておられた。東は大川郡から西は三豊観音寺までのうち、数か所の漁村を対象に現地に入って、そのエリアの概況やそこに棲む住民に面接調査や質問紙法による実地調査などを実施した。その地域の持つ固有の文化や特質が、その地に生まれ育つ子どもたちのパーソナリティの形成に基本的な影響を与えることになるとの仮説で調査研究をした。

漁村教育社会学では、我等が師の稲井教授はその分野の権威者であり、日本教育社会学会を香川大学で開催したほどだった。その折りには私たち学生は全国からの多くの学者のお世話をした。時には全米哲学会の会長セオドア・ブラメルド氏の調査にも協力した。この様に教育社会学研究室の学生たちは、常に稲井ゼミの研究室によく集まって勉強もし、指導も受け、世間話もしたりして強い結びつきが出来ていた。学生たちは研究テーマの設定から仮設・実地調査・分析・解釈・結論を導き出す研究の手法を学んだ。私たちの実践研究は、その結果を北海道大学で開催された第 16 回日本教育社会学会のジュニア部会で発表し好評を得たのである。確かこのジュニア部会は、稲井教授の働きかけで創設されたものと思うが現在も継続しているのだろうか。

今、静かに考えてみれば、私たちの学生時代は現在ほどの誘惑も少なく近県各地から集まって来た仲間たちは夜昼ともなく研究室に集まり勉強や雑談に耽けったものだ。それだけに稲井門下生は卒業後も先輩後輩の関係が続き、定期的に発表会を持ったものだった。

しかし、稲井門下生も先生の死後は一同が寄ることが無くなった。これも時の流れで仕方のないことだ。